

彫金

彫金（ちょうきん）とは、金属工芸品に施される様々な装飾技法を指す。彫り、打ち出し、魚子打ち、象嵌などの特殊な技法が含まれる。1955年に重要無形文化財に指定された。

弥生時代（紀元前 300 年－紀元後 300 年）にアジア大陸から伝わり、日本の冶金技法とともに儀礼的・機能的な装飾品として発展してきた彫金の技法。19 世紀後半、明治政府により刀剣類の着用が禁止され、金属加工の機械化が進むと、金属職人たちはその技法を美術品に転用し、日本のあらゆる工芸品を海外に売り込むようになった。

彫金には、線彫り、浮き彫り、透かし彫りなどの専門技法があるが、石川県に最も関係の深い技法は、金や銀などの柔らかい金属を硬い地金に埋め込む「象嵌（ぞうがん）」である。この技法は「加賀象嵌」と呼ばれ、石川県の前身である藩の名前にちなんで名づけられた。加賀象嵌の特徴は、地金の留め方にある。職人が地金に斜めに切り込みを入れ、開口部より底部の方が広くなるようにする。象嵌を打ち込むと、このくぼみに広がり、その上に地金のはみ出した部分が押しつけられる。

石川県立美術館には、加賀藩が誇った象嵌の燈（あぶみ）など、彫金の技法を示す作品が数多く所蔵されている。